

第9回日本ジオパーク全国大会 アポイ岳(北海道様似町)大会

# 口頭発表セッション要旨集

No.	日付	時間	コーディネーター	団体名	発表者	標題	
1	1日目	14:00~14:15	廣瀬 亘 (道総研)	殿谷 梓 (徳島)	防災科研・糸魚川	松原誠・竹之内耕・西澤あずさ・青井真	「防災科研 地震だねっと！」の開設
2		14:15~14:30			阿蘇	池辺伸一郎・兒玉夏子・宮北志野・高森秀平・石松昭信・鍵山恒臣・鳥井真之・鶴田直之	地震や噴火等による自然災害の防災教育等への活用
3		14:30~14:45			山陰(多畛ヶ池)	飼牛 明	地域住民が行うジオパークの未来づくり
4		14:45~15:00			室戸	小笠原翼	ジオパークで広がる地域住民の世界
コーヒーブレイク(15:00~15:15)							
5	10月6日(土)	15:15~15:30	横山 光 (北翔大)	郡山鈴夏 (山陰)	立山	山岡勇太、今堀喜一、志村幸光	立山黒部ジオパークにおける地元メディアとの連携事例
6		15:30~15:45			天草	鶴飼 宏明	見どころの保全と活用
7		15:45~16:00			糸魚川	竹之内耕、宮島 宏、茨木洋介、小河原孝彦	フォッサマグナパーク(糸魚川-静岡構造線の断層見学公園)のリニューアル
8	2日目	9:30~9:45	大野希一 (島原)	片山美雪 (下仁田)	隠岐	長田 樹	学習指導要領×ジオパーク=隠岐スタイルの学校教育
9		9:45~10:00			室戸	堺喜久美	室戸ジオパークガイド団体の変化と多様性
10		10:00~10:15			豊後大野	芝崎聡通	地域資源を活用した新たな「滞在型周遊観光ツアー」の展開
11		10:15~10:30			浅間山・三陸	山田雅仁、杉本伸一	日本ジオパーク委員会による現地審査報告書から見た審査体制の特徴
12		10:30~10:45			山陰海岸	先山 徹	北前船によって流通した石材の研究とジオパーク間の連携の可能性
コーヒーブレイク(10:45~11:00)							
13	10月7日(日)	11:00~11:15	鶴飼宏明 (天草)	新名阿津子 (伊豆)	島原	森本 拓	土石流被災家屋保存公園におけるジオガイドのガイド有料化への取り組み
14		11:15~11:30			室戸	千頭 利智	室戸の「ジオパークホテル!？」構想
15		11:30~11:45			豊後大野	渡部順子	「大分の野菜畑ぶんごおの」・ジオパークの恵みを食で伝えることの意義
16		11:45~12:00			栗駒	佐藤 充	栗駒山麓ジオパーク特産商品「栗駒山麓のめぐみ」の取り組みを通じた持続可能な地域振興の試み

平成30年10月6日(土)~10月7日(日)

様似図書館(様似町)

## 「防災科研 地震だねっと！」の開設

松原誠(防災科学技術研究所)・竹之内耕(糸魚川世界ユネスコジオパーク)・  
西澤あずさ・青井真(防災科学技術研究所)

発表者の連絡先: mkmatsu@bosai.go.jp

発表カテゴリ:

(運営・審査)事務局以外の組織との連携に関する事例、拠点施設等の整備や情報発信に関する事例

(教育・研究)学校教育の事例、研究成果を地域に還元する取組み

(地域づくり)ジオガイドの認定・養成に関する事例

### 1. 「防災科研 地震だねっと！」の開設に至ったきっかけ

公益社団法人日本地震学会では2017年にジオパーク支援委員会を発足させ、2018年に「ジオパークで使える地震学」の講習会を実施した。その際、糸魚川世界ユネスコジオパーク(糸魚川ジオパーク)でのフォッサマグナパーク(糸魚川-静岡構造線の見学公園)のリニューアルオープンに併せて、有感地震から人が感じないような小さな地震活動も含め、防災科学技術研究所(防災科研)で決められた糸魚川ジオパーク周辺の震源分布を見られるようにしたいという要望があった。これを受け、防災科研においても成果の普及という面から、ジオパーク向けの地震活動を公開するサイトである「防災科研 地震だねっと！」を開設した(図1)。そして、このサイトのQRコードをフォッサマグナパークの案内板に掲載することにより、ジオサイトの現場において、足元で起こっている地球内部の現象を現地で見学的に捉えることができるようになった。

### 2. この事例の実施を通じてよかった点

糸魚川ジオパークのスタッフと共に、ホームページへの掲載内容を精査することにより、地元の人や観光客にとって見易く理解されやすいホームページである「防災科研 地震だねっと！」が作成できた。このページでは、過去24時間から10年間までの震源分布を自由に選択して見ることができる。さらに、火山や河川や主要都市もプロットされているので、震源分布の具体的な位置の把握も容易である。また、過去に被害をもたらした歴史地震も列挙されており、日ごろからの防災対策の重要性も認識できると考えられる。

フォッサマグナパークのリニューアルオープン後、地学学習を目的とした教育旅行に多くの中学生や高校生が訪れるようになった。「防災科研 地震だねっと！」を使って地震発生状況を見て、「わーっ、今日も地震起こっている！」と地震に興味を持ってきている姿を見ると大変嬉しく、

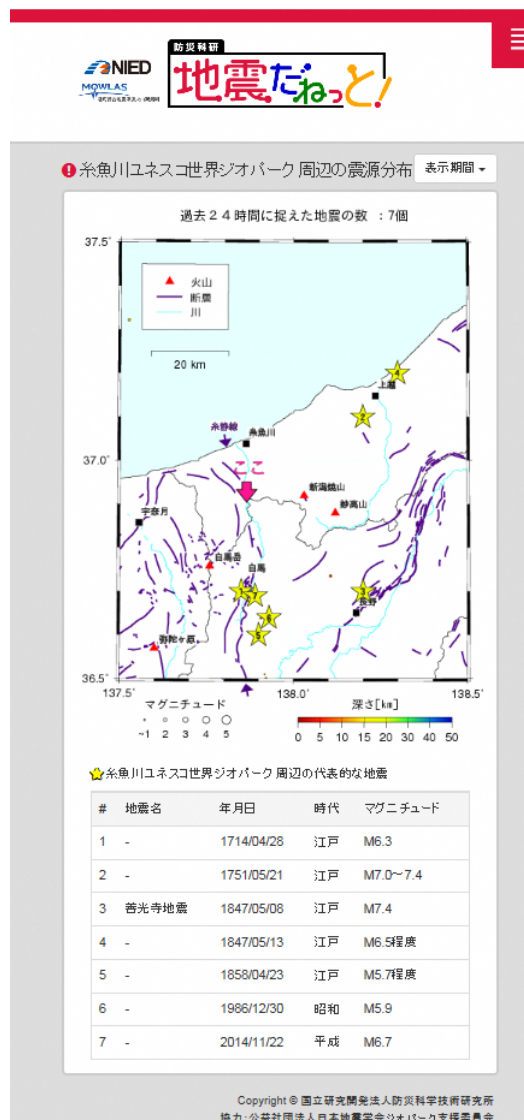


図1 「防災科研地震だねっと！」のホームページとQRコード



導入して良かったと思える。また、地元の方々は、今回のフォッサマグナパークのリニューアルオープンを好意的に受け止めてくれている。このサイトの閲覧を通じて、断層近傍に住む人々が地震活動から見る地球内部の動きに関心をもってもらえるのではないかと期待したい。

### 3. 今後の展望

フォッサマグナパークの案内板だけではなく、フォッサマグナミュージアム（博物館）等の展示にも QR コードを掲載することで、糸魚川周辺の地震活動を色々な場所で見ることが可能となる。また、博物館の近くには、防災科研が運用する地震観測点もあり、糸魚川では雪崩・地すべり・火山による災害も関連するので、今後、さらに両者で連携・協力していきたいと考えている。

「防災科研 地震だねっと」はジオパーク向けの震源分布図表示サイトである。糸魚川ジオパークだけではなく、他のジオパークについても、要望に応じて領域や表示内容を検討し、それぞれのジオパーク周辺の震源分布図などを掲載していきたい。

日本ジオパークネットワークと防災科研は包括的な連携協定を締結する予定である。この協定を受けて、「防災科研 地震だねっと」の活用に関する覚書を糸魚川ジオパークと交わす予定である。今後は、他のジオパークとも覚書を交わ

し、「防災科研 地震だねっと！」を他のジオパークでも導入していただきたいと考えている。また、防災科研には、火山や地すべりや雪崩等の地震以外についてのデータや研究成果もある。包括連携協定や覚書を通じて、ジオパークの皆さんと協力し、地球の活動に関するデータや研究成果などを分かりやすく一般の人に伝えていきたいと考えている。

### 4. まとめ

有感地震から人が感じないような小さな地震活動も含めて、糸魚川ジオパークの足元で起こっている地球内部の現象を、フォッサマグナパークの案内板に掲載された QR コードからホームページにアクセスすることにより、現地で視覚的に捉えることが可能となった。今後は日本ジオパークネットワークと防災科研は包括的な連携協定やジオパーク協議会と防災科研との覚書を通じて、他のジオパークからの要望にも応えて行きたい。

## 地震や噴火等による自然災害の防災教育等への活用

池辺伸一郎・兒玉夏子・宮北志野・高森秀平・石松昭信・鍵山恒臣・鳥井真之・鶴田直之（阿蘇ジオパーク推進協議会）

発表者の連絡先: ikebe-shinichiro@asomuse.jp

発表カテゴリ:

（保全）景観、露頭、地域遺産の保全に関する取組み

（研究・教育）地域遺産の研究事例、地域研究を促進させる事例、生涯学習的活動の事例、研究成果を地域に還元する取組み

### 1. この事例に取り組んだきっかけ

自然災害からの復旧、復興を図りつつ、災害をどのようにして教育や観光面でプラスに換えていくか、ジオパークとして知恵をしぼらねばならない重要な役割がある。その中では、災害を引き起こしたジオハザードに対して、調査研究を行い、地球科学的なおもしろさを掘り起こしながら、防災教育ひいては地域振興のための素材としてプラス面としても有効に活用していくことが重要である。

2016年に発生した熊本地震や、近年頻発する火山噴火によって、阿蘇ジオパークエリアも大きな被害を受けた。しかしこのような自然現象が繰り返されることは自明のことであるので、自然災害からの復旧・復興だけでなく、その教訓を社会に活かす必要性を感じた。

この取り組みを推進してよかった点および課題

噴火や地震といった自然現象を理解し、発信

していくうえで、大学や博物館などの研究機関とジオパーク協議会間の連携が深まったことはよかった点である。また、地球（断層）活動の一端を目のあたりにできたことや、本物の断層や火山灰、噴石などを使って子どもたちや修学旅行生に防災教育ができたことも、防災意識を向上させるうえで大きな効果があった。

一方で、大学や博物館と連携し、さまざまな手法を使って情報を発信しようとしているが、その手法がまだ確立できていない。

### 2. 今後の展望

熊本地震や阿蘇火山の噴火のメカニズム等については、大学などの各研究機関による調査が継続されている。また南阿蘇村では震災遺構の保存が、さらに熊本県では震災ミュージアム構想が進められている。阿蘇ジオパークとしては、このような動きとの連携を図っていく予定である。

## 地域住民が行うジオパークの未来づくり

飼牛 明（浜湯山・多鯰ヶ池活性化委員会）

発表者の連絡先: kaigo@tanegaike.com

発表カテゴリ:

(その他)地域の歴史遺産発掘調査と学校教育で地域のジオ未来づくり

### 1. はじめに

ジオはその地域に暮らす人々の生活と密接に関係しており、時に人は大自然の変化に苦勞しながらも上手く利用したり、知恵で克服したりと、脅威を感じながらもその土地を捨てる、逃げることなく自然と共生して生き抜いてきた日本人の農耕定住文化の力強さを感じる。

山陰海岸ジオパークのジオサイトの一つである「多鯰ヶ池」は古くより地域の暮らしを支えた池であり、江戸時代後期に邪魔者で生活の脅威であった「砂」をこの池の水を利用して流し込み、広大な沼地を農地へと干拓することによって生まれたものである。その池と沼の間の暗渠（手掘りトンネル水路）は、現在も現役で農業用用水として利用され、総延長830 m に及ぶが、存在は知られながらもその全容は知る者は少なかった。

この度、50 数年ぶりに一部重機などを用いた発掘調査が行われ、その全容が調査された。ここではその発掘調査結果とそれに伴って生じた地域の変化を紹介する。

### 2. この調査結果の紹介を通じて起きた地域の変化

この暗渠の調査結果を知った地域住民は、現在の暮らしがこの暗渠に支えられて居ることに感謝と保全の重要性を認識することとなった。特に未来づくりに欠かせない子ども達次世代がその歴史的価値を知り、現在の暮らし

を支える元となった先人達（江戸時代）の苦勞を再認識して歴史遺産を守る気運が高まった。

### 3. 課題

課題は、暗渠のため見学も危険度が高く、今後ジオスポット（※原文ママ）の安全な観光化をどうするかにある。また、地域の歴史遺産と言えども決してメジャーではなくマイナーな歴史遺産のため、詳細調査に歴史専門家や地質学芸員などとチーム結成して、より信用性のある調査資料を作成すべきだったが、資金的な問題で出来ていない。

### 4. 今後の展望

今後将来に残すべき地域の歴史遺産として、現地の観光化整備とジオ未来づくりに向けて、学校への出前講座をジオラマ模型で説明する予定である（暗渠の見学は危険度が高く現時点ではジオラマ模型による講習が限界）。

### 5. 結論

ジオパークの保全・普及とは、それぞれの地域のジオサイトに埋もれた歴史遺産の価値を知ることにある。それを通じて、地域住民が主体的にその歴史遺産を守ること、地域のジオ未来づくり、しいてはジオパーク全体の未来づくりの起点となる。

## ジオパークで広がる地域住民の世界

小笠原翼（室戸ジオパーク推進協議会 国際文化専門員）

発表者の連絡先: tsubasa@muroto-geo.jp

発表カテゴリ:

（地域づくり）地域住民をまきこんだイベントの実施例・ジオガイドの組織運営に関する事例  
（ネットワーク活動）他のジオパークとの交流事例

### 1. はじめに

室戸ジオパークがその活動を始めて約10年が経ち、その活動に関わっている地域住民の生活は少しずつ、しかし着実に変化している。特に深く関わっているのは室戸ジオパークでガイド活動をしているガイドさんたち。地域を知るためにそれまで出会うことのなかったいろんな世代の地域住民との出会い、他ジオパークへの視察や視察受け入れによる出会い、全国大会参加による出会いなどにより、人脈が広がるとともに多くの刺激を受けている。

### 2. きっかけ

室戸市のジオガイドグループは3団体あるが、今回紹介するのは「室戸市観光ガイドの会」というガイド団体。そのガイド団体は2016年から英語レッスンを開始している。その理由は外国人観光客の増加と、海外の方でガイドを受けたいという方の増加である。しかし現在ガイドの会では国際文化専門員や国際交流員に通訳を依頼することでしか、英語ガイドが実施できていない。近い将来、挨拶や簡単な日常会話、道案内くらいは自分たちでできるようになりたいと、ガイドからの希望を受けて実施している。

### 3. 地域の変化

英語レッスンを通じて、ガイドらの出会う人たちは格段に多くなった。海外から室戸ジオパークにやってくる旅行者に簡単なジオパークの情報を伝えたり、海外からの団体客の対応を国際文化専門員と共にするようになった。さらに室戸ジオパークが連携協定を結ぶ予定のランカウイユネスコ世界ジオパークの地元ガイド団体とレンジャーらと、定期的にビデオミーティングを実施している。そうした国際的な交流を通してガイドらが意識するのは英語力もちろんだが、「ユネスコ世界ジオパークに認定されている地域で活動するガイド」という点である。

### 4. この事例の実施を通じてよかった点

先月イタリアで開催された第8回ユネスコ世界ジオパーク国際会議において、ガイド2名がその活動について口頭発表を行なった。たどたどしい英語ではあったが、2016年からずっと学んできたことを英語で多くの聴衆の前で発表した。口頭発表終了後は、多くの他ジオパークの方々から「刺激を受けた」という言葉をいただいていた。発表内容というよりは、高知県の田舎の町で暮らす「普通の人」だった人がジオパークガイドになり、どんどん関わっていくことでイタリアで口頭発表するにまで及んだ点である。「彼女たちの世界がどんなに変わったことだろう」「自分たちの地域でも外国人のためのガイドツアーに悩みがあるが、ガイドさんが英語で発表したことで刺激をもらえた」などと感想を伝えにきてくれる方が多くいた。

### 5. 今後の展望

イタリアでの口頭発表はガイドらの大きな目標の1つではあったが、通訳なしで室戸の良さを外国人観光客に伝えたいというのが、彼女らの最大の目標である。そのため今後も英語レッスンを積極的に継続していく。これを伝えたい！

ジオパークはそれに関わってくる地域住民に対して、いろんな可能性につながるきっかけとなる場所と信じている。大きく言えば誰かの人生を変えられる力を持つのがジオパーク。深く関われば関わるほどジオパークはその関わってくる方にチャンスを与えることができる。それを市民にいかに伝えるか、特に若い世代にいかに伝えるかが、室戸ジオパークが現在抱えている課題の1つである。

ジオパークはまちづくりであると同時に、そこに住むひとづくりでもある。実際にジオパークに関わって生活が変わっていった人たちに全面に出してもらうことで、遠目からジオパークを見ている方たちにいい影響を広めていきたい。

## 立山黒部ジオパークにおける地元メディアとの連携事例

山岡勇太、今堀喜一、志村幸光（一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会）

発表者の連絡先:yamaoka@tatekuro.jp

発表カテゴリ:

(運営・審査)事務局以外の組織との連携に関する事例

(研究・教育)学校教育の事例

(ツーリズム・PR 活動)ジオツアーの開発・実施事例、SNS やマスメディアの活用事例

### 1. はじめに

立山黒部ジオパークは、富山県東部の9つの市町村と富山湾の一部から構成されるジオパークであり、民間主導の運営体制という特徴をもつ。この特性を活用し、これまで多くの民間企業や民間団体と連携しながらジオパーク活動を行ってきた。それは広報啓発活動においても例外ではない。今回は、立山黒部ジオパークと地元マスメディアとの協力・連携事例について紹介する。

### 2. 取組むことになったきっかけや背景

本ジオパークは、富山県の県庁所在地である富山市を含み、エリア内の総人口は63万人を超える。無論、地域内において継続的に出前講座など広報啓発活動を行っているが、依然としてジオパークの認知度や社会的な必要性が高いとは言い難い。そこで、立山黒部ジオパークやその活動を知ってもらう機会をより多くの方に提供できるよう、地元マスメディアと良好な関係を構築する努力の結果、各種マスメディアで立山黒部ジオパークが取り上げられる機会が増加している。

### 3. この事例を実施してよかった点または課題としてでた点

現在、立山黒部ジオパークが主に連携しているのは、地元の新聞社、テレビ局、ラジオ局である。新聞社ではジオパークのネットワークを意識し近隣のジオパークを訪れるジオツアーの企画や、PR 動画の作成を行った。地元の民放テレビ局は、ジオパーク教育の現場を毎年取材しており、年度末に番組「ジオパーク探検隊」を放送している。ラジオ局では月に一度のレギュラー番組が始まり、年間通して地域の魅力を発信している。また、NHK 富山放送局はジオパークを継続的に取材しローカルニュースで特集を組む等している。このように、ジオパークの話題がマスメディアに取り上げられることで発信力と信用力がより強化され、地域内の認知度は着実に高まりつつある。また、純粋な広報活動のみならず、教育活動やジオツアーが題材として取り上げられるなど、ジオパーク活動全体のPRにも繋がっている。

問題は、これらの活動が多くの場合情報の“発信”にとどまるという点、地域内における認知度の定量的把握が難しく、連携の効果が評価しにくいという点である。次のステップは、マスコミの支援・協力の追い風を、目に見える実績、例えば、立山黒部ジオパーク協会の会員増強や地域のネットワークの強化につなげることである。

## 見どころの保全と活用

鵜飼 宏明(天草ジオパーク推進協議会)

発表者の連絡先:ugai-hi@city.amakusa.lg.jp

発表カテゴリ:

(保全)景観、露頭、地域遺産の保全に関する取組み、規制区域への入場制限等、活用規制に関する事例、ジオサイトの定義や選定に関する事例

(研究・教育)地域遺産の研究事例、地域研究を促進させる事例、学校教育の事例

(ツーリズム・PR活動)ジオツアーの開発・実施事例、旅行会社や地元の観光協会との連携に関する事例、ジオガイドによるサイトの案内事例、ジオガイドの認定・養成に関する事例、ジオガイドの組織運営に関する事例

### 1. はじめに

ジオパークにおける地質遺産の保全は、大変重要な取り組みである。ジオパークの中で保全すべき対象は露頭であるが、その見どころや露頭は、壊れてしまうと価値がなくなるものと、壊れてもその破片や一部だけでも更に利用できるものがある。特に後者は、うまく活用すればジオツアーなどに活用することができる。今回の事例発表では、壊れてしまったものをうまくジオツアーで活用している取り組みを紹介する。

### 2. きっかけ

天草ジオパークは化石を主な見どころとするジオパークであるが、化石そのものは一度採集すれば同じものを生産することが不可能であるため、その持続可能な活用は難しい。一方で、自然現象で壊れていく露頭の崩壊物の中にも化石が含まれているが、それらは研究や教育活動に活用されないまま埋もれている状況にある。それらをうまく活用すれば、地域資源をより効率的に活用した研究や教育が展開できることになる。

もう一つの課題として、露頭の多くは私有地内にあり、その土地の持ち主がいることが常である。しかしその土地の持ち主がその土地の中にある資源の価値を知らないばかりに、

露頭の活用を妨げてしまったり、むやみに破壊してしまうことも起こりうる。したがって、大地の遺産を保護するには、利用者に決まりを守ってもらう必要があると同時に、その土地の所有者も大地の遺産の保護と活用に関して理解を得る必要がある。利用者だけに負担をかけるのではなく、ギブアンドテイクでお互いが気持ちよく利用できるシステムづくりを考えたことが、今回の取り組みの背景である。

### 3. 地域の変化

化石などの大地の遺産を活用することが、子供達の教育や家族連れの来訪に繋がるということが認知され、地域資源として確実に認知された。そのことにより、化石を保護する、盗掘から守る意識が芽生えている。

### 4. 課題

化石資源は無尽蔵ではないので、できるかぎり長く資源を活用する取り組みを考え出す必要がある。

### 5. 今後の展望

天草ジオパークで得られた成功例や、失敗例を含め、各ジオパークへ提供することで、互いに技術や知識を向上できることを望む。



## フォッサマグナパーク(糸魚川－静岡構造線の断層見学公園)のリニューアル 竹之内耕、宮島 宏、茨木洋介、小河原孝彦(糸魚川ジオパーク推進室)

発表者の連絡先: ko.takenouchi@city.itoigawa.lg.jp

発表カテゴリ:

- (運営・審査)拠点施設等の整備や情報発信に関する事例
- (保全)景観、露頭、地域遺産の保全に関する取組み
- (研究・教育)地域研究を促進させる事例、研究成果を地域に還元する取組み
- (ツーリズム・PR 活動)ジオツアーの開発・実施事例、SNS やマスメディアの活用事例

### 1. はじめに

糸魚川ユネスコ世界ジオパークのメインサイトである「フォッサマグナパーク」は、糸魚川－静岡構造線の断層露頭がみられる場所である。しかし、1990年の工事中に断層露頭に地すべりの危険が生じたため、掘削露頭を擁壁で覆うことになった。しかし結果的に断層露頭の露出面積が狭くなり、断層の存在がわかりづらい野外展示となってしまった。そこで、2009年に世界ジオパークになったことを契機に、この課題を解決するための取り組みを始めた。

### 2. この取り組みを推進してよかった点

専門家・市民・博物館(行政)の三者が協力・連携していく枠組みを立上げ、ジオパークの視点(保全、展示、教育、研究、地域など)から、脆弱な断層破碎帯を見学しやすい野外

展示に変えることができた。その中でも、防災科学技術研究所から「地震だねっと!」を開発していただき、糸魚川地域周辺の地震分布がスマートフォンなどを通して現場で閲覧できるようになった。

### 3. 課題

断層破碎帯はそもそも脆弱なため、露出面積が増えれば露頭の劣化が進行するという課題がある。断層露頭のモニタリングを継続し、持続可能な修復方法を考える必要がある。

### 4. これを伝えたい!

国際的価値を有する露頭に対し、専門家・市民・博物館(行政)の三者が協力・連携し、脆弱な断層破碎帯を見学しやすい野外展示に変えることができたこと。

## 学習指導要領×ジオパーク＝隠岐スタイルの学校教育

長田 樹（隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会）

発表者の連絡先: osada@oki-geopark.jp

発表カテゴリ:

（運営・調査）事務局以外の組織との連携に関する事例  
（研究・教育）学校教育の事例、生涯学習的活動の事例

### 1. はじめに

学校教育で地域資源を活用するために、各教科の学習指導要領をふまえたプログラムを作成した。その狙いは、現場の教員が日常の授業の中で主体的に扱える地域資源を活用した持続可能な教育課程を目指すことにある。これまでは、総合的な学習の時間の授業の際、事務局のスタッフなどがその都度内容を考え、学校に直接行き、ふるさと学習（ジオ学習）を行ってきた。しかし、それらは単発的な学習であることに加え、事務局員の負担が大きく、持続可能な取り組みが困難という背景があった。そこで、環境省と協力して、地域資源の活用を学習指導要領の教育課程に組み込んだプログラム集を作成した。ここではその取り組みと効果を紹介する。

### 2. プログラムの開発とプログラム集を作成して良かった点

- これまでの単発的な学習ではなく、持続可能な教育システムを確立することができた。
- 教員が主体となって地域資源を活用した教育を行うことで、事務局スタッフの負担が軽減された。
- 教員自身も授業づくり等に割く時間を短縮でき、効率よく地域について学べるようになった。

### 3. プログラムの開発と実施を通じて起きた地域の変化

教員向けのジオ学習の研修が年々増加傾向にある。現場の教員と新たなふるさと教育の開発などを行う取り組みも増えた。また教員向けの研修会も、平成27年度は1回だけだったが、平成28年度は4回、平成29年度は

6回と、年々増加傾向にあり、プログラムの構築が教員のジオパーク教育に関する興味を喚起した可能性がある。

### 4. 課題

実際に野外学習を行うにあたって、子どもたちが地域資源の場所に行くまでの移動手段をどう確保するかが課題。このほか、プログラムの質を落とすことなく持続可能な形にするために、以下の点を検討しなければならないと考えている；

- ・ジオパーク推進協議会、環境省、各町村教育委員会、学校等の役割分担の整理
- ・定期的な学校人事による教師の引継ぎや新任教師へ周知方法の場の確保などの確立
- ・各機関との情報交換不足や推進側の学校現場に対する理解度などが理由に上がる。

### 5. 今後の展望

今後は以下の3点の整備を進めていく；

- 学習指導要領は変わるため、その変化に応じたプログラム及び運用の更新を行う。
- プログラムの持続的な改善の実現するために、各関係機関及び学校現場との現状把握や、情報を共有する仕組みを作る。具体的には、教育プログラムの作成と運用にかかわる組織の役割分担を明確化したフローチャートを確立させる。
- 小中学校の取り組みだけでなく、幅広い世代の状況に合わせた教育プログラムを開発・推進する。中でも、未就学児へのジオパークを活用した教育体系の確立や、大学と隠岐の高校生との交流活動を充実させる予定である。

## 室戸ジオパークガイド団体の変化と多様性

堺喜久美(室戸市観光ガイドの会)

発表者の連絡先: kikumi@muroto.fiberbit.netinfo@muroto-geo.jp

発表カテゴリ:

(研究・教育)学校教育の事例

(地域づくり)ジオガイドの認定・養成に関する事例、ジオガイドの組織運営に関する事例

(ツーリズム・PR 活動)ジオツアーの開発・実施事例、ジオガイドによるサイトの案内事例

(ネットワーク活動)他のジオパークとの交流事例

### 1. これを伝えたい！

室戸市観光ガイドの会(室戸ジオパークのガイド団体)は高齢化、収益、持続的な運営の側面で問題を抱えていた。しかしこれは、日本のジオパークのガイド団体のほとんど共通の問題を抱えているように思われる。その問題をクリアするためには、現在のガイドらの考え方が柔軟でなければならない。若い世代の考えや意見を受け止める土台が、そのガイド団体にないと若返りや持続的な活動は難しい。今回の発表を通して「室戸市観光ガイドの会」がいかに新たな取り組みに向けて変化しているのか、という点を共有したい。

### 2. 地域の変化

「室戸市観光ガイドの会」が常に新しい取り組みを実践していることが、徐々に地域に浸透していくことで、地域の若者(地元出身もしくはIターン、Uターン組)たちをガイド活動にうまく取り入れることに成功している。若者を取り込むことで、ガイドの収入についてより真剣に議論する場が生まれ、さらにPR方法についても多様な取り組みができていく。

### 3. この事例の実施を通じてよかった点

68歳だったガイドの平均年齢が55歳まで

下がり、若返りが実現できている。さらに収益の問題でも、複数のツアーを開発・商品化することで、ガイド料金の値上げに成功している。

課題として見えてきたものは、実働ガイド数をどうやって確保するか。お客様の視点にたち、複数のガイドコースを用意してきたが、それはこれまでガイドとして活動していた人たちが、新たなコースについて勉強することを意味する。なかなか時間が取れないガイドもいる中で、決まった人数しかコースの勉強会に参加することができず、現役で仕事を持っている若いガイドの実働時間にも限界がある。複数のガイドコースに対応するためのガイド人数が足りない状況がある。

### 4. 今後の展望

ガイド団体の若返りが実現できたということは、地域の若い世代に「おもしろいことをしている団体」と、わたしたちが認知されているということ。今後も若い世代が興味を持つような研修内容やツアーコースを開発し、広くPRしていく予定である。さらにお客様に対しても、より多くの選択肢を提供できるようにコース開発をしていきたい。

## 地域資源を活用した新たな「滞在型周遊観光ツアー」の展開

芝崎聡通（ツーリズム豊後大野（おおいた豊後大野ジオパーク））

発表者の連絡先: info@toyotabi.net

発表カテゴリ:

（ツーリズム・PR 活動）ジオツアーの開発・実施事例

### 1. この事例に取り組んだきっかけと狙い

当社は出発地の旅行会社が企画し、参加者を目的地へ連れて行く、従来の「発地型観光」ではなく、地域振興に繋がると期待されている「着地型観光」にこだわっている。これは、自社だけが儲かれば良いという発想ではなく、自社を通じて、他の企業への波及効果を促すことで、地域経済の活性化に繋がりたい、という経営理念に基づいたものである。

商業的な観光資源に乏しい豊後大野市では、観光地を巡るような従来の「発地型観光」型ツアーでは集客は難しく、そのこともあってか大手旅行業の進出もほとんど見られない。一方で、当地域はジオパーク、エコパークに認定される等、豊かな自然を最大限に活用した、独自性のある着地型観光を展開するための素地が十分にあり、ニッチな市場ながらこれを寡占することで、他にはない旅行業のスタイルを確立できると考えている。そこで、この地域の利点を生かした「滞在型周遊観光ツアー」を展開することにより、多くの方に豊後大野市の素晴らしさを知ってもらい、リピートしてもらおう事で、地域内に良い資金循環を生み出したと考えている。

### 2. 良かった点

現在行っている「着地型観光」ツアーは日帰りツアーが中心ではあるが、参加されるお客様の中には、もう少しゆっくり楽しみたい、友達グループとまた来たい等の声をいただくことが増えてきている。

### 3. 地域の変化

地座型周遊観光ツアーは、地域を熟知し、地域に根付いているからこそ提供可能なツア

ーである。そのツアーで活躍するのがジオガイドであり、ジオパークに認定されたからこそ誕生したガイドの皆さんに旅行業者として依頼をすることが可能となった。ジオガイドは、地域のことを熟知しているからこそ案内できる、話ができるという利点を活かし、地域密着のツアーが提供できるため、従来のありきたりな観光ツアーとの差別化も図れている。

### 4. 課題

大分県内においては、別府市、由布市といった、全国的に有名な観光地があり、大分県に訪れる観光客の大半は、こうした場所を目的地としたものである。大分県内のほぼ全域に温泉があるが、豊後大野市には温泉がない等、商業的な観光資源に乏しいため、知名度が低い。そのため、県外は勿論、県内の旅行者に対しても、豊後大野市に関する積極的な情報発信を行わない限り旅行の候補地とならないため、販売促進にある程度の費用をかける必要がある。

### 5. 今後の展開

個人客や小グループのお客様をターゲットとする滞在型の旅行商品の充実を図り、丁寧に対応していくことが、田舎における着地型観光を持続可能なビジネスとして成立させるためには必要なことだと考えている。従来の口コミによるリピートや、アンテナショップでの告知だけでなく、ポスティング等の販売促進を積極的に行うことで、県内外へ向けて広く周知していく。近隣の都市部で市場性を確かめながら、将来的には関西圏、関東圏に向けた販路開拓を行う予定である。

## 日本ジオパーク委員会による現地審査報告書から見た審査体制の特徴 山田雅仁\*、杉本伸一\*\*（浅間山ジオパーク推進協議会\*、三陸ジオパーク推進協議会\*\*）

発表者の連絡先: ymd-asamageo@email.plala.or.jp

発表カテゴリ:

（運営・審査）ジオパークの審査に関する事例

日本ジオパークの認定審査が年々厳しくな  
ってきているように感じている。日本ジオパー  
ク委員会は、これまでの現地審査報告書を全  
て公開しているため、これらを解析し、ジオパ  
ークの審査体制の経年変化に関する実態を  
検討した。

計量テキスト分析のソフトウェアを活用して、  
過去の日本ジオパーク委員会による現地審  
査報告書を解析したところ、現地審査報告書  
の頻出単語は、時間の経過とともに特定の単  
語が出現するようになってきた。このことから、  
ジオパークの審査に関する重要なポイントが

年々明確化してきたと考えられる。

ジオパークの審査に対する重要なポイント  
が明確化してきたことが分かったのはよい点  
であるが、審査員のジオパークに関する価値  
観、ジオパークの理念に関する理解度が年々  
変化してきた可能性がある。そのため、特にジ  
オパーク事務局のスタッフは、過去に得た知  
識だけに捉われず、審査に関する最新の情報  
収集をし続け、常時ジオパークの重要なポイ  
ントを理解したうえで審査に臨むことが重要で  
あろう。

## 北前船によって流通した石材の研究とジオパーク間の連携の可能性

先山 徹(山陰海岸ジオパーク・兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科)

発表者の連絡先: geosakiyama@rrm.u-hyogo.ac.jp

発表カテゴリ:

(運営・審査) 事務局以外の組織との連携に関する事例

(保全) 景観、露頭、地域遺産の保全に関する取組み

(研究・教育) 地域遺産の研究事例、地域研究を促進させる事例、研究成果を地域に還元する取組み

(地域づくり) 既存の地域産品の活用に関する事例

(ツーリズム・PR 活動) ジオツアーの開発・実施事例、旅行会社や地元の観光協会との連携に関する事例

日本海沿岸の各地には江戸時代から明治時代にかけて往来した北前船に係る遺産が多く残されている。それらは日本遺産で取り上げられるなど、各地で注目されているが、その視点は歴史・文化的な側面からのみであり、ジオ遺産としての見方はほとんどされていない。また、ジオパークの遺産としてもあまり注目されていないのが現状である。演者はこれまでに北前船などで各地に運ばれた石材の特徴を記載し、その産地や流通経路についてまとめつつある。まだデータの集積は不十分であり、個人での研究に限界があるが、今回の報告では現時点で明らかになってきた石材の地域特性について報告する。

日本海側のほとんどのジオパークで北前船によって流通した石材が見られる。そのうち

特に広域的に流通した石材として、島根半島・宍道湖・中海ジオパークで産する砂岩(来待石)、恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークを中心に分布する福井市産の凝灰岩(笏谷石)、瀬戸内海各地の花崗岩類が知られるが、その流通傾向には地域性と時代による変化が見られる。

石材の産地を明らかにすることは、その当時の流通や文化を知るうえで有益である。石材の流通を中心とした北前船に係る遺産は、日本海側の各ジオパークに見られる。それらをそれぞれ地質遺産として見直し、その研究をつなぐことによって、日本海側の各地のジオパークの連携を深めることができる可能性がある。

## 土石流被災家屋保存公園におけるジオガイドのガイド有料化への取り組み 森本 拓（島原半島ジオパーク協議会）

発表者の連絡先: staff@unzen-geopark.jp

発表カテゴリ:

（地域づくり）ジオガイドの認定・養成に関する事例、ジオガイドの組織運営に関する事例  
（ツーリズム・PR 活動）ジオガイドによるサイトの案内事例

### 1. はじめに

島原半島ジオパークでは、これまでジオガイドのガイド有料化を実施してこなかった。今後、持続可能なガイド組織を運営していくためには、ジオガイドの有料化が必要不可欠であり、さらにこの点については日本および世界審査の際に指摘を受けている。また、ジオガイドのスキルを向上させるためには、ガイドが説明する「場」を増やす必要がある。そこで今回は、ジオサイトの一つである「土石流被災家屋保存公園」において、有料でのジオガイドの案内に関する事例を紹介する。

### 2. この取り組みを推進してよかった点、課題および地域の変化

良い点は、ガイド料金を頂くことによりジオガイドがより良質なガイドを提供するための意識付けが図れたことである。お客様に対するアンケート結果から、「地元の人に地元の話を知ることが嬉しい」という意見を多く頂いた。また「ジオガイドの話は楽しかった」という声も

多く、大変反響があった。

問題点としては、具体的なガイド料金を明示せず、“ガイド活動協力金”方式を採用したことである。お客様からみれば、いくら払えば良いか不安にさせてしまう。また、お客様に対してガイド料金を頂くというアナウンスを事前に伝えなかったため、「詐欺にあったような気分になった」という苦情を頂いた。各ジオガイド間で、お客様に対する声掛けの方法など、ガイドの取り組みについての意識の統一を図る必要がある。

### 3. まとめと今後の展望

ガイド料金を頂くことにより、お客様に対してジオガイドがより良質なガイドを提供する意識付けや、ガイド有料化に関するお客様への具体的な案内方法を考える良い機会になった。今後は、継続的にジオガイドが案内するジオサイトを設けることや、お客様から頂いたアンケート結果を踏まえて、よりプロフェッショナルなガイドを目指す。

## 室戸の「ジオパークホテル!？」構想

千頭利智（室戸市観光ガイドの会）

発表者の連絡先: misakikakohotel@outlook.jp

発表カテゴリ:

(地域づくり)地域住民をまきこんだイベントの実施例、既存の地域産品の活用に関する事例、ジオガイドの組織運営に関する事例

(ツーリズム・PR 活動)ジオツアーの開発・実施事例、ジオガイドによるサイトの案内事例

(ネットワーク活動)大会や研修会を誘致・開催した際のエピソード

お客様第一の視点で、いかにジオパークをPRするか、ということを考えてみると、これまでとは異なる方法が自ずとわかってくる。それを伝える発表にしたい。

### 1. きっかけ

私は「室戸市観光ガイドの会」のガイドであり、地元のホテル経営者でもある。ホテルを経営する中で、室戸に来られているお客様がどのようなガイドツアーのあり方を望んでいるのかが見えてきた。そこで私だけでなく、ホテル従業員にも積極的にガイド養成講座やその他ジオパーク関係の研修に参加してもらい、ホテル全体でジオパークをPRできるようにしている。その根底にあるのは、「お客様がジオパークに何を求めているか」という観点である。身近で利便性を可能にするためにはホテルがその役割を担う拠点施設の一角として活動と運営が望ましいと考えたのが、この取り組みを始めたきっかけである。

### 2. 良かった点と地域の変化

ジオパークの事務局では対応が難しい早朝や夜間のガイド受付をホテルが請け負うよう

になり、お客様の多様なニーズに応えることができるようになってきている。

また、私が経営するホテルが、単に宿泊施設として利用されるだけでなく、室戸ジオパーク関係者やガイド団体の会員らが集まり、ディスカッションをする場としても機能するようになった。さらに従業員のほとんどがガイドの会の会員となり、事務局が実施する研修会に参加していることから、ジオパークや地域にまつわるイベントなども時折実施できる機会が増えてきた。

### 3. 課題

ガイド料金等の問題から、ホテルの収益はまだ上がってはいない。将来的には、ジオパークガイドをホテル運営に結びつけ、きちんと「稼げる」仕組みづくりを、地元ガイド団体、ジオパーク事務局とともに協議していきたいと考えている。

### 4. 今後の展望

さらに多くのホテル宿泊のお客様がジオパークガイドを受けてくださり、ジオパークについて考えることのできる空間となるよう、活動を継続していきたい。



## 「大分の野菜畑ぶんごおの」・ジオパークの恵みを食で伝えることの意義

渡部順子（NPO法人おくぶんごツーリズム研究所（おおいた豊後大野ジオパーク））

発表者の連絡先：bungoono.jk@gmail.com

発表カテゴリ：

（地域づくり）商品の開発と販促に関する事例

（その他）ジオパークの恵みとして、食を中心としたPRと地域ネットワークの構築

### 1. この事例に取り組んだきっかけと思い

地域経済の活性化なくしては、ジオパーク活動の継続やネットワークの拡大は難しい。ジオパークをPRする中で、来訪者とのコミュニケーションが充実していき、リピーターとなり情報が広がっていくと考える。その浸透が「食」を基点にして起こり、ジオパークを支える経済基盤となると思い、活動している。

「大分の野菜畑ぶんごおの」が当市のキャッチコピーである。野菜こそ大地の恵み。ジオパークの賜物で、当たり前になっていることを見直し、価値を感じ、商品として売っていくということが重要だと思い、4年前に「ベジカフェ Ms.ミズ」という日本野菜ソムリエ協会認定レストランを始めた。さらに、ここに来たら「ジオパーク」をはじめとする地域情報がすべてキャッチすることができる場所とし、ガイドの手配や有識者への連携等何でもおまかせのスペースとして機能させるために、カフェの形態をとった。それは集い、語り、一緒に過ごす時間と場所がジオパークの推進には欠かせないと思っていたからである。

### 2. 良かった点と反省点

当初は「豊後大野市」にこだわって地元産の野菜のみで商品を考えていたが、大地の恵みは豊かでもあり、限界もあるものなので、ジオパークストーリーにのっとって「阿蘇～豊後大野」のエリア内で食材調達をする方向に変えた。

「ベジカフェ Ms.ミズ」のオープンによって、地域住民の集う場所や、ジオガイドの拠点ができた。団体客のランチ提供もできるので、各種旅行会社からも利用してもらっている。働くスタッフもすべて野菜ソムリエの有資格者なので、ジオサイトと野菜の話が好評である。当店で召し上がっていただくだけでなく、弁当という

形で提供も可能なので、広い年代に利用してもらっている。

### 3. 地域の変化

地元野菜の良さ、食べ方の工夫など伝えるうちに、オープンから3年過ぎた頃から、地元の方々の認知度が急速に上がったようである。弁当・仕出しの中にも「ジオパーク」を意識したものや、創作で見立てたものなどを入れるので、楽しんでもらっている。地元野菜をたくさん食べられる食事処として利用者が増えた。

### 4. 課題

高齢化率の高い地域なので、若手のスタッフが少なく団体対応が続くと体調管理が大変である。事業が安定したら若手雇用を積極的にすすめたいがマンパワー不足が問題である。

### 5. 今後の展開

豊後大野市内各所でこのような「ジオパーク+食」をテーマにしている飲食店はまだ少ない。今、頑張って食でジオパークを意識付けしている仲間と連携し、「ジオパーク+食」をテーマにしている飲食店を今後増やしていけるよう、活動を継続したいと思う。また、弁当部門では熊本と大分を結ぶ豊肥本線の全線復旧を願ってジオパークをテーマにした商品開発を視野に入れている。

視察研修にしても、交流活動にしても必ず「食」は必要となるので、ジオパークを連想させる食や大地の恵みストーリーは不可欠である。経済効果を視野に入れるとき、次世代の活躍の場としての「食」の提供を、行政と連携して衛生管理的に安心安全な食の加工所が叶えば、広域にPRできると考えている。

## 栗駒山麓ジオパーク特産商品「栗駒山麓のめぐみ」の取り組みを通じた持続可能な地域振興の試み

佐藤 充(栗駒山麓ジオパーク推進協議会)

発表者の連絡先: mitsuru@310326.com

発表カテゴリ:

(運営・審査) 事務局以外の組織との連携に関する事例

(研究・教育) 研究成果を地域に還元する取り組み

(地域づくり) 地域住民をまきこんだイベントの実施例、商品の開発と販促に関する事例、既存の地域産品の活用に関する事例

(ツーリズム・PR 活動) ジオツアーの開発・実施事例、アンケートやマーケティング調査に関する事例

### 1. この事例に取り組んだきっかけと狙い

栗駒山麓ジオパークでは、2015年に日本ジオパーク認定を受け、「ジオパークへ来たのだからジオパークらしいものを食べたい・おみやげを買いたい」という来訪者からの声と、地域からの「来訪者からの声に応えたい」「ジオパーク資源を活用した商品を提供したい」という声が高まった。これを受け、ジオパークが持続可能な地域経済活動に寄与する方法として、食商品に関わる「物語(ジオパークストーリー)」を地域住民と協議会が協働で考案し、商品提供時に伝える取り組みをはじめた。ジオパークを活用し、活動に参画することで持続可能な地域振興を目指している。

### 2. 良かった点と地域の変化

35の栗駒山麓ジオパークの食にまつわる「物語」を構築し、ツアーや視察受け入れの際に活用してきた。現在まで、多くの来訪者から好評を得ている。「物語」を持った食商品を通

して、消費者はもちろん地域からも、地域をあらためて見直した、のような声が多く聞かれ、ジオパークによる新しい視点の取り組みとして良い効果が得られているように考えている。また、食商品の魅力について地域の方が誇りを持ち、内外に勧めることが増えており、地域への効果もあると考えている。

### 3. 反省点

「物語」の認定プログラムとしては十分でない部分もあり、改善を目指す。

### 4. まとめと今後の展開

ジオパークにおける持続可能な地域振興の取り組みの中で、地域住民によるジオパークにかかわる「物語」の構築は大いに有効であることが分かった。今後は「物語」認定プログラムの改善を含め、食以外の商品への応用や、他分野(具体的には学校教育等)への「物語」を持った商品の活用を構想している。